

# The Genius Jockey

抹茶小豆餅

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

20XX年、天才と称された鷹匠の打ち出した91勝の新人歴代最多勝利数をはるか  
に塗り替える104勝をマークした天才が現れた。

G1も勝ち、順風満帆な滑り出しを披露した天才——結城 韶（ゆうき ひびき）  
彼はこの先、鷹匠とともに競馬界を導いていく。そう疑わなかつたのだが……。



・この小説はフイクションです。実在の団体、個人名とは一切関係ありません。

・ただし、実在の人物を参考にしています。もちろん名前は変更します。

・鷹匠等、ウイニングポストから名前を押借する場合があります。ご了承ください。

・人名と同様、馬の名前も押借します。

・結局主人公の俺TUEEE！になります。

受けられます。

・作者は知識が圧倒的に不足しています。お前それは違うだろ…という場面も多々見

・以上の点でよろしい方は、ぜひお立ち寄りください。

# 目 次

天才は、鮮烈なデビューを果たす。

1

天才は、悲しみに暮れる。

天才は、虚ろに日常を過ごす

天才は、思い出の地を訪れる

天才は、トラウマと向き合う。

| |

40 30 19 11

# 天才は、鮮烈なデビューを果たす。

『さあ、第4コーナーを回つて最後の直線に向かいます！ 先頭はブレイクランナー、ブレイクランナーが逃げる！ 2番手追走するのは1番人気、グレイトバスターですが先頭との差は2馬身、3馬身と開いていく!!』

秋が深まり、もうすぐ冬に差し掛かろうかという最中、京都競馬場。

——マイルチャンピオンシップ。

春のマイル王が、スプリント界の猛者が、そして秋に向けて成長した上がり馬たちが一堂に会するこの舞台。その大レースもいよいよ終盤、最後の直線。

『逃げ切り体勢に入つたブレイクランナー！ 鞍上の結城、ここで鞭を一発入れた！ ぐんぐん伸びていくブレイクランナー、道中のハイペースの中、どこにそんな力が残されていたのか!? 2番手はグレイトバスターと後方から追い込んできたサクラマイ

1 天才は、鮮烈なデビューを果たす。

ペースの争いか!』

ここまでハナを一度も譲らず、ここまで逃げてきたブレイクランナー。ハイペースの中を逃げた同馬に、観客も、ジョッキーたちもが直線で落ちるだろうと思つていた。だが、今にして思えば、ブレイクランナーの鞍上は一度も追つていなかつたのだ。

馬の走りたいように走らせ、それでいてハイペースを作り上げた——ブレイクランナーとは、それほどのポテンシャルを秘めていた。

そして驚くべきは、この判断をしたジョッキーが――

『先頭独走態勢に入つた! ブレイクランナーだ! ブレイクランナーゴールイン!!  
2着には1番人気、グレイトスターが入つたか。8番人気のブレイクランナー、まん  
まの逃げ切り勝ち!! 鞍上の“新人”結城に、初G1をプレゼントしました!! 今、  
ゆっくりとブレイクランナーの頭を撫でています』

新人、今年デビューした……ということだ。

### 3 天才是、鮮烈なデビューを果たす。

翌日のスポーツ新聞にはでかでかと書かれていた。

——天才鷹の再来か!? デビュ一年に初G1制覇!!

——天才現る！ 穴馬をG1馬へと導いた！

——鷹は一言。「ようこそ、こちらの世界へ——」

確かに、うまい騎手ではあつた。道中馬を気持ちよく走らせる術を最初から持つていて、いつもその馬のベストを出して帰つてくる。結果勝ち星はぐんぐんと伸びていき、いつしか新人が目指すボーダーライン、30勝を超えていった。

しかし、G1はマイルチャンピオンシップが初挑戦だつた。単に騎乗依頼に恵まれなかつただけなのだが……。

結局天才は、104勝のG1を一つ勝ち、JRA賞最多勝利新人騎手の栄冠を手に入れた。この時は、世間は新たな波の再来を疑いはしなかつた。



時は過ぎて春、青葉賞。このレースは、5月末に開催される競馬の祭典である東京優駿、またの名を日本ダービーに出走する馬のトライアルレース。このレースで2着までに入つた馬には、ダービーへの優先出走権が与えられる。

このレースにも、天才が出ていた。天才が騎乗する馬は、天才が所属する厩舎の期待する馬で、体調不良などでここまで出遅れたが、無事ならばクラシックもとれるといわ

れた馬だ。

当然天才は、並々ならぬ闘志を秘めていた。世話になつてゐる厩舎の期待の馬で、ここまで3戦すべてに騎乗してきている。それだけではなく、調教から追い切りまでべて管理してきたいわば相棒だ。

「よし！ 絶対勝とうぜ、相棒!!」

——ぶるるつ!!

天才の鼓舞に応えるように、相棒のデステイニークライも鼻を鳴らす。この時の天才は、去年ほど勝ててなく、またG1勝利もなかつた。焦りもあつたし、何より乗るのが相棒だ。気持ちが変な方向に高ぶつていた。

……だからだろう。ゲートに入る際、脚が少し浮ついていたことに気づかなかつた。

——よしつ！ いい感じだ……!!

5 天才是、鮮烈なデビューを果たす。

第3コーナー手前。手前替えもスムーズに決まり、第3コーナーを回る。残りは第4コーナーと直線のみで、現在4番手。閃光場のこいつならベストなポジションにつれてる！

だがこの時、気づくべきだった。デステイニーの鼻息が、いつもよりも荒い……。

そんなことに気づきもせずに迎えた第4コーナー、大槻の向こう。

——さあ最後の直線だ！ 行くぞデステイニー！！

鞭を一発、打つた。

その瞬間、世界は反転した。

(あれ？ 何だ、この感じ……)

## 7 天才是、鮮烈なデビューを果たす。

周りがスローに流れていく。

そしてその後にやつてきた衝撃。

「ツガハツ!!

そして激痛が天才を襲う。肺の中の空気がすべて出されただけではなく、骨にも嫌な鈍痛がある。肋骨か、腕か、脚か……どこか骨折、ないしひびが入っているだろう。

(……いてえ。なんで、こんなことに……?)

確か俺は、レースの真っ最中だつた。大槻の向こうに差し掛かつて、いよいよスタートをかける。そんな時だつたはずだが……。

(そのあとに、デステイニーに鞭を入れて――……!!  そうだ、デステイニーは?!)

痛む体に鞭を打つて、起き上がる。地面は芝のチクチクする感覚が残っている。そう

か、俺は落馬したのか。他の馬たちはゴール板を通過しようとしていた。

そして――

「ツ?! デステイニー!!」

その相棒、デステイニー……デステイニークライが、横たわったまま動かないでいた。その顔は痛みなど感じずに安らかに、まるで眠っているようだつた。天才はそつと痛みに耐えながらデステイニークライに近づいた。

「デステイニー……大丈夫か?」

……。

「なんか言えよ、デステイニー……。頼むよ……」

しかし天才の声もむなしく、デステイニークライは反応を見せない。目は完全に閉じ

9 天才是、鮮烈なデビューを果たす。

られて、ピクリとも動かない。天才は虚ろな笑みを浮かべながら、デステイニー・クライに触れる。

「なあ……なあ!! なんか反応しろよ!! 起きてくれよ!!」

懇願するように、まるで現実を受け入れたくないかのように。

「デステイニー!! 起きてくれよおおおおおおおお!!」

デステイニー・クライ号、左後ろ脚の複雑骨折により、回復は不可能と判断。予後不良の診断を下され、安楽死にとられた。



# 天才は、悲しみに暮れる。

茨城県某所。病院。

真っ白い部屋には簡易なベッド、棚、そしてカーテンにテレビと最低限なものが置かれていた。そのベッドには、一人の青年が開けたカーテン越しに空を見ていた。

コンコンコン。

「……どうぞ」

短く挨拶を返す。引き戸式のドアを開けて入ってきたのは、美浦に廄舎を構える青年一響の所属先の調教師、藤原 和臣（ふじわら かずおみ）だつた。

藤原は一言邪魔するぞ、と言い近くの椅子に腰かけた。

「……」

「……よお。聞いたぜ？ 肋骨折つて全治2か月だっけ？ 大層に怪我したもんだな、あつはつはつは!!」

「……」

藤原の笑いも、むなしく消えていく。響は外を見たまま、一向に動かない。

ガシガシと頭をかいた藤原は、一つコホンと咳払いをして響、と呼んだ。ようやく、静かにではあるが響が藤原の方を向いた。

ひどい顔だった。あれだけ自分に自信を持つていたとは思えないほどに、その目からは生氣を感じなかつた。だがそんなことはお構いなしに、藤原は言葉を発した。

### 13 天才は、悲しみに暮れる。

「お前のことだ。さんざん後悔したんだろう。お前は騎手になる前……子供の時に遊びに来ていた時から、馬の考へてることがなんとなくわかるやつだった。それはこの業界では天賦の才だ。だからこそ、お前は今そうして傷ついている」

「……」

「あの時、デステイニーの脚に異変が起きていたことに気づいてやれなかつたことを気に病んでるんだろ？　なまじ馬の考へてることがわかるお前だ、異変にも人一倍機敏なやつだからな」

「……っ」

響はぐつとした唇をかみしめた。一息置いて、藤原は静かに続けた。

「気休めにもならんだろうが、聞け。……あいつが死んだのはお前のせいじゃねえ、俺の責任だ。だからお前はもうこのことは忘れろ」

この時、冷え切つていた体中の血液が一気に沸騰するのを感じた。バツと顔をあげて藤原の胸ぐらをつかんだ。

「忘れる……だと？……忘れられるはずがないじゃないですか!!　あいつは……あいつは、俺に言つてたんです。脚が痛いって、走らせないでくれつて、もう走りたくないって!!」

今にして思えば、あいつはレースに入る前から異様に発汗していたし、後ろ脚もわざかに引きずつっていたようにも思える。

だが響は、そんなことにも気づかずにレースに走らせた。追つた。鞭を入れた。デステイニークライもそれに応えようと必死に走つていた。

だが無情にも、デステイニークライの脚は限界に来ていた。発走前には限界だつたのに、まくつていつて鞭まで入れて……耐えられるはずがなかつたんだ。

「俺は……、ダービーに出してあげたくて！　俺自身がダービーに出たくて!!　俺に任せてくれた先生たちに応えたくて!!!　……そんなことばかり考えていたから、あいつの

ことを考えてやれなかつた

「……」

力なく、胸倉を掴んでいた手が落ちた。

「……俺のせい、なんですよ。あいつのことをわかつてやれなかつた、俺の——」

パン!!

乾いた音が、ほとんど何もない病室に響いた。藤原が、響の頬を引っ叩いた音だ。

「……糀がつてんじやねえぞ、若造が」

15 天才は、悲しみに暮れる。

「……え」

今度は、藤原が胸ぐらを掴みかかった。勢いよく掴まれた響はくぐもつた声を漏らし、壁にそのまま叩きつけられた。肋骨が悲鳴を上げたが、そんなことはお構いなしに藤原は怒鳴りつけた。

「何が俺の責任だ。何がわかつてやれなかつただ!!　たかだか二十歳にも満たねえ若造が、知つたような口をきくんじやねえ!!」

「ぐうつ!?　……せ、……せい…?」

「あいつの管理は俺の仕事だ!　レースに送り出した時点で、責任は全部俺にあるんだよ!!　追い切り、調教、その段階で気づけなかつた俺の責任だ!!」

「…!?　ち、ちが……つ!?

「違わねえ!!　ダービーに出たかつた?　自分に期待してくれてる人に応えたかつた?」

いいんだよお前たち若造はそれで!! 自分のことに必死になつて、そうやつて成長していくんだろうが!! 僕たち調教師は、そんな若造たちに力を貸すのが役目だ!」

一滴、ぽたりと、藤原の目から涙が零れた。

「そんな若造が、こんなことで成長をやめるんじゃねえ……。こういうことの責任は俺たち年寄りがとつてやる。お前たちは……ただがむしやらに、真っ直ぐに、成長していってほしい。若者の道を開くのが、俺たち親父の役目なんだからよ」

「…………あ…………」

するりと、藤原の手から力が抜け、響は壁にもたれかかつた。藤原は乱暴に目元をぬぐいさつきと入口へと歩いて行つて——振り向きざまに言葉を発した。

「絶対、戻つてこい。こんなことでいなくなるなんて、ぜつてえ許さねえぞ」

そうこぼして、病室を去つていった。騒動を聴きつけたのか病室前にはやじ馬ができ

ていたが、藤原が通ろうとすると、皆さつと道を開けて藤原を通した。

一人残された響は、力なく膝を抱え、ポツリと言葉を落とした。

「……めん、先生……。俺、もう乗れない……」

藤原の思いは響に届かず、響は退院したその日に姿を消した。

## 天才は、虚ろに日常を過ごす

競馬というコンテンツが世間に与える影響というのは本当に微々たるものだ。競馬を見ているという人間は、この日本に1割もいないのではないかと思う。

また競馬を知っている人間も、騎手が1人表に出てこなくなつたとしても、時が流れにつれて徐々に記憶は薄れゆくものである。当初は騒がれたとしても、半年余りが過ぎれば落ち着きを見せるものだ。

普通であれば……だが。

『阪神JFも終わり、いよいよ来週は有馬記念です。今年を占う競馬の祭典、皆さんの夢

を乗せた16頭の優駿が中山の舞台で躍動することでしょう。

そして同時に、去年競馬界を震撼させた天才ジョッキー、結城騎手が突如姿を消してもう半年が過ぎようとしています。皆さんの推測では落馬負傷で復帰が遅れているとみているようですが……なんにせよ、この競馬界にもはや結城騎手はなくてはならぬ――』

そこまで聞いてテレビを消した。

「……俺は、そんなに持ち上げられるようなジョッキーやないさ……」

虚ろに、そう呟いた。

あの日病院を退院して以降、響はトレセンにも競馬場にも顔を見せていない。調教に乗つてもいないし、レースにも出てはいない。

もう乗る意味がない。乗りたいという気持ちが湧いてこない。怠惰に朝食を食べ、適当に街をぶらつき、適当に立ち寄った本屋で本を読んだり、中学時代の友達と遊びに行つたり……およそ19歳の少年が過ごしている日常を過ごしている。

親も突然帰ってきた時は驚いていたが、理由はなんとなく分かつていたのだろう。母は優しく、いつまでも家にいたらいいと言つてくれた。父も多くは語らなかつたが、響の好きなようにさせてもらつてはいる。ただ少し、寂しそうな顔をしていた。

あれほど常日頃、馬の事を考えていたのが嘘のような日々。親の気づかいに甘えて何時しか半年もの月日が流れた。

「ん？」

今日も街をぶらつくかと腰を上げたとき、机の上の携帯が震えた。

「……」

ディスプレイには藤原先生と記されていた。響はちらつと見て、胸が締め付けられる気がした。

響が逃げたあの日から、欠かさず連絡を寄越してくれる先生に、申し訳なさと自分の

意氣地のなさ、諸々の負の感情が響を束縛している。

やがて、携帯は震えなくなつた。

「先生……」

ポツリと言葉を落とした。

するとその時、再び携帯が震えた。だが2度震えると、再び携帯は落ち着きを見せる。これは今までにないことだつた。普段なら、一度電話が入つたあと震えだすことはないというのに。

何かとディスプレイを覗くと、不在着信と新着メールの着信を示すマークが点滅していた。

「メール？　いつたい誰から……」

もしかしたら中学時代の友人から遊びの誘いかな？　そう思いメールを開こうとし

て、手が止まつた。

「藤原、先生？」

電話しかしない藤原からの初めてのメール。そこにはいつもの負の感情ではなく、なぜ？ という疑問が浮かぶ。

だがそれでも、メールを開いて確認しようとは思えなかつた。見たくなかつた。見てしまつたら、再びあの恐怖と向き合わなければいけない気がした。

「ごめん先生、もう俺は……俺の乗つた馬が死ぬところを見たくないんだ。もうあの、デステイニーのような虚ろになつていく悟つたような眼を見たくないんだよ」

そう言葉を零して、携帯を再びたたんで、ズボンのポケットに入れた。

いつも以上に胸に穴が開いたような感覚を覚えつつ、街をぶらつくためのズボンにパークーと言つたシックな装いに身を包み、玄関で靴を履く。

「行つてきます」

そう言つて、ドアを開けた。

「よお響、やつと見つけたぜ」

「ツ!?

瞬間、ドアをバタンと勢いよく閉めた。奥の方から母の非難の声が飛んでくるが、今  
の響にとつてそんなのはどうでもよかつた。

(な、何でこんなところに——先生がいるんだ!?)

そう、先ほど家の前に立っていたのは藤原だつた。調教で朝早くからトレセンにいる  
はずの藤原が、なぜこんなところにいるのか。そもそも顔を合わせたくないとか、いつ

も連絡に出なくて合わせづらいとかいろいろな感情がごちゃ混ぜになっていた。

こうなると、外出するという選択肢は無くなつていた。出ていかなければ、先生も諦めて帰つていくだろう。何をしに来たのかは知らないが、とにかく会いたくなかった響はガチャリと鍵を閉め、念のためチエーンを掛けてリビングへと向かつた。

しかし、リビングのドアを開いた先に、信じられない光景が広がつていた。

「あらあら先生、もうよろしいのですか？」

「いや奥さん、もうとは言いますが、すでに紅茶15杯くらいは体に入つてしまつているのですがねえ……もうタプタプですよ」

「あらあら」

「いやあらあらじゃないよ!! 母さん何してんの!?」

「あら響、出かけるんじやなかつたの？」 それ人にを指さすんじやありません。母さん、  
そんな子に育てた覚えはありませんよ？

あ、そうそう先生聞いてもらえます？

小さいころの響はそれはそれは泣き虫でしてね。何があるとお母さーんって」

このままだと人の黒歴史をべらべらと喋りかねないと、響は近くにあつたレシピ本を投げつける。その本をキヤツチし、流れるようにキツチンの方に投げ返し、レシピ本を固めてある本棚に見事吸い込まれていった。

いや、そんなことはどうでもいい。そんなのは今に始まつたことじやない。

「せ、先生、どこから入つたんですか!? 玄関のドアにはカギを」

「そこのベランダからちよちよいつと」

「不法侵入ですよ!?」

「んなもん、お前に会うためだ。それくらい何でもない」

何でもないって……何でもないって……。

響はぐつと拳を握りしめ、蚊の鳴くような声でポツリとこぼした。

「……何で、来たんですか」

「そりやお前、可愛い可愛い教え子を迎えて来たんだろうが」

「ツ!! い、嫌です……」

「——というと思ったからな。今回の目的はそうじゃない。奥さん、ちよつとこいつを

借りていきますね』

「あらあら」

いやそれ返事じやねえから!! とか思つてはいるが、先生はおもむろに俺の手を掴んでベランダに向かい、出る前にご馳走様でしたと一言言つて、響と出ていった。

「ちよつ!? 先生、いつたい何なんですか!?」

「あん? お前は黙つてついてくりやいいさ。心配すんな、取つて食おうつてんじやねえから」

そして家の前に停めてあつた車の助手席に響を投げ入れると、バタンとドアを閉め、藤原も乗り込んで、すぐさま車を発進させた。

その最中、響はこう思つた。

29 天才は、虚ろに日常を過ごす

(あれ?)

これって普通に誘拐なんじゃ……)

# 天才は、思い出の地を訪れる

無理やり拉致された響は、ふて腐れながらも窓の外の移り変わる風景を肩肘をついて眺めていた。

(「一体どこへ行こうつてんだ? 府中ならもう通り過ぎてるし……」)

自宅のある霞ヶ浦から1時間車に揺られている響。最初はトレセンにでも連れていかれるのかと思ったのだが、トレセンのある方向からは逆に走っていたので、早々にその可能性は捨てていた。

「……先生、いつたい俺をどこに連れていくつもりなんですか? カれこれ1時間は乗ってるんですけど……」

何度目かわからない質問を飛ばす。実は先程から質問を飛ばしているのだが、藤原の方は一言、「着いたら分かる」とだけ言つてそれ以上は語らなかつた。

しかし、今回は違つた。藤原はにやりと笑い、首でクイッと窓の外を指し示した。釣られるように響はまた視線を窓の外に動かし、ようやく気が付いた。

「お前にも馴染みがあるはずだぜ？　3年間ここに居たんだからよ」

見慣れた道、そして遠くに見えるのは緑の看板にでかでかと書かれた文字。

「——競馬、学校……」



競馬学校。千葉県白井市に建てられた日本中央競馬会の教育訓練機関で、中央競馬に所属する騎手のほとんどはここの中出身だ。また、厩務員の育成も行われている。

騎手を目指すものは、まず中学を卒業下、もしくは見込みの15歳から20歳とされている。だが、18歳を超える者の合格は、柔軟性の欠落などによりほぼあり得ないとされている。その選ばれた1学年約10名が3年間の訓練に励む。

訓練を重ね、3年卒業時に試験を受け、模擬レースに挑み、騎手免許試験の合格を経て初めて騎手デビューを果たせる。卒業時には約10名が3名まで減るなど狭き門を潜らなくてはならない。

響も約2年前、こここの騎手課程3年を経て卒業、デビューを果たした。

「……懐かしいな」

競馬学校の景観を目に入れて、思わずつぶやいた。

「はは、そうだろ。お前が卒業してもう2年経とうとしてんだぜ？」

「そう、ですね。……」この景色は昔のままですね

（だけど、あの頃の俺はもういない……。あの頃の、馬に乗ることでワクワクしてた俺は、もう……）

どれだけの成績を残そうと、響はまだ卒業して2年目を迎えた若手に過ぎない。中身も成熟しきっていない響には、馬の死はトラウマを植え付けるには十分すぎた。

「響、こっちだ」

藤原に声を掛けられ、気が付けば藤原は本館の横を抜けていった先にいた。慌てて追いかけた響だが、藤原は歩幅を緩めることなく先へ先へと進んでいた。

響も追いかけていつて、着いた先は――

「こいつ……コース、ですか」

外周1400mの外走路と呼ばれるコースだつた。今は実技練習の最中なのか、3頭の馬がコース上を走つていた。2頭の馬の間を1頭が入つていくという訓練をしてい るらしい。その1頭はうまく間に入り、そのままぶつかることもなく抜いていった。

「……へえ」

その淀みのない、迷いのない捌きに響は思わずうなつた。他の2頭を操る練習生のレ ベルが極端に低いというわけではないが、それでも抜き去つていった練習生は上手かつた。特に感心を覚えたのはその騎乗姿勢だ。

（下半身も柔らかく使っている……。バランスも悪くない。だからこそ、馬の方も大人 しく指示に従つてている……）

先輩の中にも下半身の固い騎手がいる中、柔らかく乗りこなす練習生を見て、響は口 角のあがるのを抑えられなかつた。それに気づいた藤原は、視線を響に向ける。

「ん？ 何かいいと思つたやつがいたのか？」

「あ、いえ。今年の新人も、レベルの高い人がいるなと思いまして」

「へえ、あの先頭のやつか？」

「はい。……あつ」

楽しそうに感想を言い合う中で、響はふと思い直した。自分に何がわかるというのか、もう乗ることができないというのに、と。

それに気づいてか気づかずか、藤原は苦笑の表情を浮かべる。そして腕時計を一瞥し、響の肩を叩いた。

「……もう、11時半か。せつかく来たんだ、教官に挨拶でもしていくか」

「――え。」

۷۸

「いやあ藤原先生、ようこそお越しくださいました！」

「いえいえ林教官、昨日は突然すみませんでした」

本館ロビーにて笑顔で握手を交わす藤原と教官の林敦<sup>はやしあつし</sup>。そして藤原の後ろでできるだけ気配を立つてゐる響の図が出来上がつていた。実はこの林という教官は、教練の厳しいことで生徒間で有名で、鬼が現世に現れたとさえ言われたほどだ。

その林はひつそり後ろに佇む響に近づき、おもむろに耳をつねりあげた。

「あああああああだだだだだだだだだだだだだつつつつ  
!!!!???

「こおんの大馬鹿が!!  
お前はこの半年何をしとつたんだ!!」

先ほど、ニコニコと藤原と握手を交わしていた人と同じ人物とは思えぬ形相で怒鳴りつけた。それも耳元で。

耳は抓りあげられて大激痛だわ、耳元で大声で怒鳴られ鼓膜に大ダメージだわ、落馬のほうがまじいやないかと思える仕打ちだつた。よくこの教官がいて3年間脱走しなかつたと改めて思つた。

だが。

「本当に……馬鹿野郎が……。半年間音沙汰なしで、心配させよつて……」

声が震えていた。痛みから解放された響は不意に林の顔を見た。

目尻に涙が見えた。

「復帰するでもなく、入院が長引いたでもなく、急に消えおつて……。俺やほかの教官が

どれだけ心配したと思つたんだ……」

「ツ!!」

思わず背筋が伸びた。あの怒鳴つてばかりの教官が初めて見せた涙だつた。その響にとつてはあり得ない出来事が、自分が与えた影響の大きさを知つた。それほどまでに、自分はこの人に心配をかけてしまつっていた。

その事実は、罪悪感として、響の胸に重くのしかかつた。思わずもらい泣きしそうなのを堪え、頭を静かに下げた。

「……すみ、ませんでした、教官」

「もういい。お前が無事でよかつた」

林も目尻に涙を浮かべながらもしっかりと笑顔を作り、響の頭に手を置いた。もう、響は涙を我慢することができなかつた。

39 天才は、思い出の地を訪れる

天才は、トラウマと向き合う。

「なるほどな、あの落馬が原因か……」

教室へと通された響と藤原は、林に響の行方をくらませた理由を話していた。デステイニーの落馬事故と、それが原因で馬に乗るのが怖くなってしまったこと。林は歯切れ悪く話す響に決して急かしたりせず、静かに聞いていた。そして合点がいった。

「イップスみたいなものだ。お前は前から馬の気持ちがわかると言っていたから、余計にダメージが大きかつたのかもしれないな」

「イップス、ですか……？　でも、イップスってやりたくてもトラウマが枷になつて無意識に力が發揮できない、心の病気ですよね？」

「そうだ。お前はもう乗りたくないと言つたな？」

コクリ。

「それはお前の心が、お前にこれ以上傷ついてほしくないと枷になつていると考えられる。もう二度とあんなことを経験したくない……そんな思いが、乗りたいという気持ちに蓋をしているんだ」

林は言葉を柔らかく、響が受け入れられるように柔らかくして述べていく。だからか、林の言葉は響の胸にストンと落ちた。なるほど、確かにそうなのかもしれない。実際、競馬を見ていても嫌悪感は感じなかつた。ただ、後ろめたさが前に来ていただけだつた。

「そうだ。競馬は今でも好きなんだ。——ただ。

「でもそれでも、根本の解決になつてないんじや……」

(というかそもそも、ここには先生に無理やり連れてこられただけで、別に乗れるようになりに来たわけではないのだが……)

そんな響の心中など全く意に介さず、林は「はつはつは!!」と豪快に笑い、おもむろに立ち上がったかと思えば響のもとに来て、頭を乱暴にぐしやっと撫でた。

「ちょっ、教官!?!」

「卒業してもお前は俺の生徒だ！ そこで、生徒を導くのが教官の仕事。お前の悩みは必ず俺が解決してやる！ それが大人の仕事だ!!」

——お前ら全員、いつまでも俺の生徒だ！ 壁にぶつかったり、悩んだりした時にやいつでも訪ねてこい！ 俺が相談に乗つてやる!!

(卒業式の後に教官が言い放つた言葉、こんなタイミングで思い出すなんてな……。ま

だまだ俺も子供つてことかな)

林に乱暴に撫でられ、氣恥ずかしいやら心が温まるやらで、不思議な氣分の響であつた。ちなみに藤原はその光景をにやにやと眺めるだけだつたとさ。



午後一時。学生は学科の授業ということで、廄舎周りや走路はたいへん静かなものだつた。響に林、藤原はそんな中、廄舎へと足を伸ばしていた。

「それで教官、何をするんです?」

道すがら、教官に尋ねた。

「ああ、まずは恐怖心を拭い去つてもらおうと思つてな」

止まる。すると厩舎から、1頭の馬を引いてくる人の姿があった。背はそれほど高くなく、柔和な雰囲気を漂わせている眼鏡をかけた教官、石野 文夫であつた。思わず背筋を伸ばした響。それに意を介さず、林は頭を下げた。

「ありがとうございます、石野教官。わがままを言つてしまいすみません……」

「いやいや、この位はお安い御用さ。リハビリということで気性はそこまで激しくない馬を選んでおいたぞ」

「助かります」

呆気にとられる響をよそに、教官同士で勝手に話が進んでいく。リハビリ？ 気性が激しくない？ いつたい何だというのだ。

すると林は、石野から手綱を受け取り、その手綱を響に手渡した。よくよく見れば馬

45 天才は、トラウマと向き合う。

の方には鞍からハミまで一式装備がなされていた。ここまでくると、今から何をしようとしているのか察しがついた。

「さすがに分かつたか。今からお前にはこいつに乗つて走路を走つてもらう。まずはウォーキング、ゆっくりでいいから乗ることへの恐怖心を取り除いてもらうぞ」

この提案に響は勢いよく頭を横に振る。

「いや、いやいやいやいや!! 乗るのが怖いんですよ!! 今だつて、手綱を持つているだけ汗が……」

「大声を出すな、馬が怯えるだろう」

「あ、すみません……」

そうだ、馬は繊細な生き物だから大声とかに敏感なんだつた。そんなことも忘れていたとは……。謝罪の意を込めて馬の鼻を撫でる、ごめんと一言添えて。

——ぶるるつ！

(……?)

ふと、響は首を傾げた。おかしい、いつもならこの馬の声が聞こえてきたはずなのに……。馬の気持ちがわかるはずなのに……。

(何も――分からぬい?)

聞こえない、分からぬい。だが同時に響は思った。これは仕方のないことかもしけない、と。

完全に馬に乗るのを恐れている響に、馬たちが心を開いてくれるはずがない。イップスにかかっている状況なのだから、仕方ないのだと。

「ようし、それじゃあ乗つてみろ。まずはゆっくりとだ。落馬の心配はないし、馬が怪我

することもなげ。リラックスして乗つてみるんだ

「……はい」

逃げ道はない。観念して震える手に鞭を打ちつつ、勢いよくジャンプして鞍に乗る。馬はその衝撃に反応してゆっくりと歩きだした。

「つ……ふ、うう……」

「そうだ、ゆっくりだ……ゆっくりでいい。怪我をする要素はどこにもないぞ、大丈夫だ結城、恐れることは何もないぞ……」

「つ、はい……！」

怖い。林がぴつたり横について励ましてくれるが、心の奥底からくる恐怖心は完全には消えない。それでも……。

(……乗ってる。馬に、乗ってる……)

脚が震えても、手が震えても、汗がにじんでも……それでも、逃げずにしつかりと手綱を握る響の顔に、今日初めての笑顔が綻んだ。